



第107代土木学会会長 林 康雄

【聞き手】鎌田敏郎 土木学会誌 編集委員長

鉄道保守のノウハウを インフラメンテナンスの 課題解決に生かし 安全・安心な社会づくりへ

**本気で打ち込んできた
鉄道と学会と登山**

——ご就任おめでとうございます。
会長は鉄道マンでいらっしゃるんですね。

林——旧国鉄、つまり日本国有鉄道に就職し、東北・上越新幹線、在来線の線増工事などを担当しました。

JR東日本時代には信濃川水力発電再開発工事や山形・秋田新幹線や北陸新幹線などの整備新幹線、上野東京ラインをはじめとする都市鉄道建設を手がけました。

また、三陸沿岸での震災復興のBRT（バス高速輸送システム）や東京駅周辺開発・丸の内駅舎の保存・復原などにも取り組みました。

2013年からは鉄建建設へ移り、工事を行ってきました。

——土木学会ではどんな活動を？

林——フェロー会員に認定されたのが1997年。その後、理事や副会長として、出版委員会委員長や社会コミニケーション委員会、名誉会員候補者選考委員会、役員候補者選考委員会の委員長を務めました。

——登山が趣味と伺いました。

林——始めたのは高校時代です。日本には1600m以上の山が1300ほどあり、国鉄で同期だった友人と、このうちの500山に登ろうと計画しました。

続けるうちに、ふと「100名山」の6、7割は登っていることに気づき、制覇を目標に設定。2010年に

は、500山と100名山の両方を達成し、記念のバンダナを特注して配ったりしてね。

山登りの醍醐味は仕事と同じで、計画を立て、仲間とともに登頂したときの達成感です。『やんちゃ心』を出すと危ない、というところも似ている。じつは一度、越後駒ヶ岳で滑落しかかったことがあります（笑）。

**安全・安心で活力のある
社会のための解決策を提起**

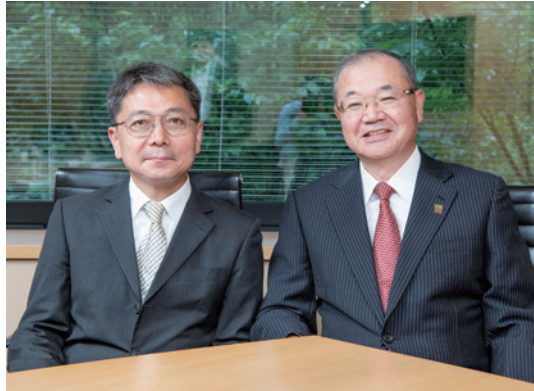
——会長は土木学会の役割をどのように捉えていますか。

林——定款には「土木工学の進歩および土木事業の発達ならびに土木技術者の資質の向上を図り、もつて学術文化の進展と社会の発展に寄与することを目的とする」とあります。

これを今日に置き換えれば、土木界ひいては日本社会の大きな課題である「安全・安心で活力ある社会の形成」のための解決策を提起することこそが、私たちの使命と考えられるでしょう。

——今年は、新たな5カ年計画JSC2020を策定する年です。

林——ここでは詳細を割愛します



2019年6月10日(月)
土木学会役員会議室にて

が、私は当面の課題として次の五つを挙げています。

- ① 自然災害や巨大地震を念頭に置いた防災・減災対策、② 建設後50年以上経過したインフラの適切なメンテナンス、③ 深刻な人口減少と高齢化が進展するなかでの担い手確保、④ インフラの海外展開、⑤ 市民社会とのコミュニケーション。

JSCE2020の策定にあたって

ては、これらの課題の解決を骨格として検討を進めたいと考えています。

また、今後の日本経済を持続的に成長させるためには、インフラ投資はどうあるべきかを熟慮することも必要でしょう。

—— 会長として重点的に取り組みたいことは？

林—— 笹子トンネルの事故以降、道路、河川、港湾などの施設では定期点検が義務付けられました。土木学会でも、第三者機関として社会インフラの健康診断を実施し、これまでに道路、河川、下水道、港湾、水道の各部門について結果と解説を公表しています。

民間企業ということもあって、診断対象としてこなかった「鉄道」についても今後、何らかの情報を発信できれば、と考えています。日本の鉄道には明治以来の歴史があり、100年以上経過した現役の構造物も多くあります。鉄道分野で培われた体系的、効率的なメンテナンスの仕組みの良い面を他分野のインフラにも取り入れられると思います。

—— 国鉄からJR、つまり官業から民営へ移行しても、技術がうまく伝承されたのはなぜですか。

林—— 「構造技術センター」という組織があり、建設からメンテナンスまですべての情報を集約して一元管理してきたからです。

鉄道会社は施設と車両の両方を自分たちで所有しており、運転士も社員です。ですから、事故が起こった場合、責任の所在が一社で完結しています。このため、事業のなかで保守の位置づけが極めて高く、組織も充実しているのです。

旬のテーマを取り上げる 会長座談会を予定

—— 学会誌では、新企画「会長連続座談会」が始まります。目的や内容をお話してください。

林—— 全部で5回の掲載を予定しています。このうち2回は「鉄道とまちづくり」がテーマで、初回はLR T(ライトレール)を軸としたコンパクトなまちづくりを推進している富山市の取り組みについて、市長と大学教授を迎えて話し合います。

続いて「建設業における担い手確保」を取り上げます。働き方改革と生産性向上について、国土交通省や日本建設業連合会の方と議論したいと

考えています。最終回のテーマは「土木と市民をつなぐコミュニケーション」。100周年記念事業の一つとして立ち上げた「シビルNPO連携プラットフォーム(CNCP)」の成果と今後の活動に期待して意見交換をする予定です。

—— これからの学会誌に、何を期待しますか。

林—— 災害対応やメンテナンス、生産性向上、働き方改革、インフラの海外展開、異分野との連携など、重要テーマについての最新情報をタイムリーに発信してもらいたいと思います。

1月号から表紙が刷新され、写真からイラストに変わりました。柔らかい印象になり、若い世代や女性にも好評なのではないでしょうか。また、6月号からは電子版の試行も始まりました。参考文献のリンクやキーワード検索など、便利な機能が盛り込まれているので、より役立つ学会誌になると期待しています。

—— 本日はありがとうございました。

【執筆】三上美絵
【撮影】大村拓也